『源氏物語』の会話文の一面
――「感動詞」の用法から――

関　一雄

はじめに

物語文学の会話文は、物語という舞台に登場してくる人物（役者）が相互に交わし合うセリフであり、地の文が描き上げる人物の動き（演技）と情景（背景）とそれらの時間の流れとの中で、語り手によってすべてが実現する。語り手は、時には舞台に黒子となって登場し、そのセリフや演技にコメントして、観客（聴者）を飽きさせない。――このような考え方からしても、会話文の存在しない物語はなく、『源氏物語』以前の成立とされる『竹取物語』『落窪物語』『うつほ物語』等の会話の多さも自然に了解される。

しかし、会話文を必ずしも物語の核としない『源氏物語』においては、殊に「会話文」自体の認定が容易でない。そのような困難を克服すべく、様々な指標が考えられいる。

会話文には会話文自体に独自の表現があって、一般に地の文と区別されている。丁寧語の「侍り」、謙譲語あるいは丁寧語といわれる下二段の「給ふ」の使用があり、主観性の強い終助詞が集中している。省略構文の多いことも会話文の特徴であるし、感動詞の多用、命令表現や意志・願望の表現も会話文に際立っている。

（鈴木一雄「源氏物語の会話文」〈『源氏物語講座』第七巻所収・一九七一年〉［傍線は関］）

些細なことで、右の常識的とも言える説明にケチをつけるようであるが、「感動詞の多用」というところには首肯しがたい点がある。「感動詞の使用」であれば、問題はなく有効な指標の一である。

宮島達夫「語いの類似度」（「国語学」八二集・一九七〇年）によれば、『源氏物語』の「ことなり語数」一一四二三語のうちで、感動詞は一九語、〇・二％である。もっとも同論文で取り上げられた一四の古典作品のうちで、『源氏物語』のものは特に低いというものではなく、同じ「物語」である『竹取』『伊勢』も〇・二％、『更級日記』『古今和歌集』の〇・三％が、高い方のものという具合である（「のべ語数」の表も示されてほぼ同じである）。

このような数値からすれば、一般的に古典作品では、感動詞の使用は抑制されたということで、『源氏物語』の会話文の特徴というほどのものではない、ということになりそうではある。

一　擬古物語（中世王朝物語）の会話文に見る「感動詞」

最初に、右に述べた〝「感動詞」の抑制〟ということに関して、平安時代の物語の影響のもとに書かれたとされる鎌倉時代の物語、いわゆる擬古物語（最近では「中世王朝物語」と呼ばれる）を取り上げて、比較の対象とする。

寛元三（一二四五）年から文永八（一二七一）年の間に成立したといわれる『我身にたどる姫君』の一節に、次のような場面がある。

また、幼き童たどり来て、（童）「あなたに人の言ひはべりつるは、三位中将殿とぞ申す」と言ふなり。（侍従）「あなかま」と手かかれて、「よな、后の宮の御悩み重しとて、御使ひに山に登りたまへりけるが、夜をこめて急ぎ帰りたまふなる」と言ふにも、すずろに胸つぶるるぞあいなきや。（巻一）

音羽の山里の尼上の家で、さびしく暮らすヒロイン我身姫のもとに、後になってそれと知れる異母兄の三位中将が、突然に訪れる場面である。引用は今井源衛氏と春秋会の共同研究になるテキストから、一部表記を改めたものだが、「手かかれて」の同書の【語釈】に「あなかま、と手かくものから」（源氏物語、夕顔）とある。そこで、『源氏物語』から、その前後を少し長めに引用してみる。

（惟光→源氏）「（略）一日、前駆おひて渡る車の侍しをのぞきて、童べの急ぎて、「右近の君こそ、まづもの見給へ。中将殿こそこれより渡り給ひぬれ」と言へば、またよろしき大人出で来て、「あなかま」と手かくものから、「いかでさは知るぞ。いで見む」とてはひ渡る。打橋だつ物を道にてなむ通ひ侍。急ぎ来るものは、衣の裾をものに引きかけて、よろぼひ倒れて、橋より落ちぬべければ、「いで、この葛城の神こそさがしうしおきたれ」とむつかりて、もののぞきの心もさめぬめりき。（略）」

惟光の源氏への報告は詳細を極めている。「童べ」の言った言葉、「大人」の言った言葉の端々まで伝えている。その典型的なものが「大人」の発する感動詞「いで」であり、これが臨場感をもって源氏の期待に応えていると言えよう。しかし同時に注意されることは、感動詞「いで」は、宮島達夫『古典対照語い表』（一九七一年）では、『源氏物語』には一一一例と多用される言わば平安時代の物語用語としての会話のそれであった、と見なされることである。

恐らく『我身にたどる姫君』の前掲場面は、「夕顔」と「我身姫」という素性の定かでない女のもとに「中将」名の男が登場してくるという共通性からしても、前者の作者は『源氏物語』を熟読しており、今井【語釈】の示唆する通り、夕顔巻を念頭に書かれていると見てよかろう。そうだとすると、夕顔巻にはない「童」の発した「よな」は、いかにも会話主体の個性を表すにふさわしい感動詞と言えよう。

『我身にたどる姫君』の会話文における感動詞がその効果を発揮しているのが、巻六に登場する「前斎宮（狂斎宮・狂宮）」と呼称される人物のものである。（この人物については、論述の都合上、本稿の最後に説明を加える。）

1しばしも局などにゐれば、いとど御物のけおこりて、（前斎宮）「をう、をう」とのみののしらせたまへば、

2（前斎宮）「さてもこの扇よ、誰がぞや。これ知らんや。さい、これ問へや。（略）」

3（前斎宮）「やや、正体無。されども、いかさまにも。（略）」

4とりつきて、（前斎宮）「やや」と病ませたまへば、

このような中世の物語の感動詞の用法を見ると、次のような一般的な記述も当たっているかとも思われる。

貴族精神の反映として、外面的な美を重んじた王朝文学においては、露骨直情を避ける傾向が強く、日常生活における卑近な会話をそのまま文章にのせることを好まなかった。それゆえ感動詞のような感情の直接的表現の語は、文章表現においては文面に表わさないか、表わしてもよそ行きの文章語として画一化された形で表わすことが多かった。（森田良行「感動詞の変遷」『品詞別日本文法講座』第六巻所収・一九七三年）

しかし、その数少ない感動詞は、『源氏物語』の会話文に巧みに用いられ、会話文の前後の場面を描き上げることにも少なからぬ効果をあげていると思われる。

二　『源氏物語』の少数用例の感動詞 (1)

――会話主体の個性を表すもの――

(1) **ああ**（1例）

○朦（もう）〳〵に耳もおぼ〳〵しかりければ、（尼君）「あゝ」と傾きてゐたり。（若菜上（三）二七一ぺ）

明石女御のお側に仕える母尼君に、明石上は見苦しいといってたしなめる。老いた母親には娘の言うことがよくわからない。「あゝ」の一言が、この場面での尼君の様子を見事に描き上げている。

なお、『紫式部日記』にも、同じ語が用いられているが、この方は幼い宮の言葉である。

●うへに「いと宮（弟宮）いだき奉らむ」と、殿のたまふを、いとねたきことにし給ひて、（兄宮）「ああ」とさいなむを、うつくしがりきこえ給ひて、申し給へば、右大将など興じきこえ給ふ。（五〇五ぺ）

(2) **おい**（1例）

○（乳母ノ娘達）「（略）」と説き聞かす。（大夫監）「おい、然（さ）り〳〵」とうなづきて、（玉鬘（二）三四〇ぺ）

肥後の田舎者の言葉が写されている。ただし、『枕草子』では、清少納言の言葉に用いられている。

●ものもいはで、御簾をもたげてそよろとさし入るる、呉竹なりけり。（清少）「おい、この君にこそ」といひわたるを聞きて、

(3) **を**（1例）

○（内大臣）「いづら、この近江の君、こなたに」と召せば、（近江ノ君）「を」と、いとけざやかに聞こえて、出で来たり。

（行幸（三）八三ペ）

姫君にはふさわしからぬ応答として用いられたものと考えたい。『落窪物語』に、男の少将の言葉として使われている。

● 少将、「御返りはいかゞ申さん」といへば、（北ノ方）「（略）」との給へば、（少将）「を」とて立ちぬ。（巻四 二二七ペ）

(4) **をを**（1例）

○（薫ガ）かくの給へば、うれしきにも涙の落つるを、はづかしと思ひて、（小君）「をゝ」と荒らかに聞こえゐたり。

（夢浮橋（五）四〇〇ペ）

幼い小君が、涙を抑えるように、はっきりと返事をする様子が「をゝ」によって描かれている。

三 『源氏物語』の少数用例の感動詞 (2)

――緊張（緊迫）した情景を表すもの――

(1) **くはや**（2例）

○又の日、（命婦ガ）上にさぶらへば、台盤所にさしのぞき給て、（源氏）「くはや、きのふの返り事、あやしく心ばみ過ぐさるゝ」とて、投げ給へり。（末摘花（一）二三〇ペ）

○（玉鬘）「（歌略）人のあやしと思ひ侍らむこと」と、わびたまへば、（源氏）「くはや」とて出で給ふに、（篝火（三）三一ペ）

両例とも、相手（命婦・玉鬘）に呼びかけている言葉には違いないが、前者は、翌日、命婦のいる台盤所まで出掛けていって、末摘花への歌を託す場面であり、後者は、源氏が玉鬘への求愛の歌を詠んで贈ったのに対し、玉鬘が、迷惑だとの趣旨の歌と返事で答えたのに、源氏が「くはや」とだけ言って、その場を去る場面である。この二つの「くはや」は、一瞬緊張した雰囲気・情景を醸し出していると考えられる。

(2) **そよや**（2例）

○いと、聖だち、すく〳〵しき律師にて、ゆくりなく、（律師→御息所）「そよや。この大将は、いつよりこゝにはまゐり通ひ給ぞ」と問ひ申給。（御息所→律師）「（略）」と聞こえ給。（律師→御息所）「いで、あなかたは。なにがしに隠さるべきにもあらず。（略）」（夕霧（四）一〇四ペ）

○（夕霧）「そよや。そもあまりにおぼめかしう、言ふかひなき御心なり。（略）」（夕霧（四）一二八ペ）

前者は、律師が落葉宮の母御息所に、大将（夕霧）はいつから宮のところに通っているのかと尋ね、御息所が否定すると、追求の手をゆるめず、「いで、あな」と感動詞を重ねる場面である。律師の用いる感動詞が緊迫感を醸し出している。後者は、落葉宮の住む小野に出かけ、小少将の君に伝言をする。小少将の話を聴き、宮

の生活ぶりを「いふかひなし」と強く批判する。「そよや」は、ここでも夕霧の言葉がこの場面に緊迫感を醸し出すものとなっている。

(3) **や**（2例）

○(空蟬ハ)物におそはるゝ心ちして、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて、おとにも立てず。（帚木（一）六六ペ）

○(源氏)「まだおどろい給はじな。いで、御目覚ましきこえむ。かゝる朝霧を知らでは寝るものか」とて入り給へば、(少納言)「や」ともえ聞こえず。（若紫（一）一九二ペ）

前者は、空蟬の寝室に突如侵入した源氏に空蟬が発した言葉であり、後者は源氏が若紫を二条院に連れ出す場面で、乳母の少納言は「や」とも言えない、という場面である。この「や」は、制止の言葉ともとられるが、両例とも緊迫した場面で用いられている。

(4) **やや**（2例）

○(源氏ガ空蟬ヲ)かき抱きて障子のもとに出で給にぞ求めつる中将だつ人来あひたる。(源氏)「やゝ」との給にあやしくて、探り寄りたるにぞいみじくにほひ満ちて、（帚木（一）六七ペ）

○まづこの人いかになりぬるぞと(源氏ハ)思ほすさわぎに、身の上も知られ給はず、添ひ臥して、「やゝ」とおどろかし給へど、（夕顔（一）一二四ペ）

前者は、空蟬を抱き抱えて奥の寝所に連れていく途中で、中将の君に出くわす場面である。後者は、息途絶えた夕顔を呼び覚まそうとする場面で、ともに源氏の発した言葉である。前項の「や」と近似しているが、後者の用法に見られるように、この方が呼び掛けの働きが強い。いずれにしても緊迫した情況下で用いられた言葉である。

四　「や」「やや」の他作品の用例

――『源氏物語』との相違――

前節で取り上げた感動詞の中で、用例が作品によっては数例見出される「や」と「やや」について、『源氏物語』のそれとの比較をしてみる。これによって、『源氏物語』の用法の特徴が更に明らかになると考える。

「や」

『蜻蛉日記』の歌と会話文に一例ずつ、『うつほ物語』・『狭衣物語』の会話文に一例ずつ見出されるが、一、二例では当該作品の特徴には結び付け難いので、四例の存する『栄花物語』を取り上げる。

1 御子いかいかとなき泣きたまふ。あなうれしと思ひて、後の御事どもを思ひ騒ぐほどぞいみじき。「や」とののしるほどに、やがて消え入らせたまひにけり。（巻一　月の宴　四五ペ）

2 母北の方はおはすべき有様にもあらざめり、とかくのことのをりに、いかにあはれに悲しう心細く、誰かは「や」とも言はんとすらむと、尽きもせず思さる。（巻五　浦々の別　二六三ペ）

3この姫君の御気色のただ変りに変りゆけば、や、こはいかにするわざぞやと、まどひたまふに、ゆゆしう悲し。

（巻一六　もとのしづく　二二七ぺ）

4四の宮（敦道親王）、いろいろの御衣どもに、濃き御衣などの上に、織物の御直衣を奉りて、御簾の片そばよりさし出でさせたまひて、「や、大臣（おとど）こそ」と申させたまへば、

（巻三　さまざまのよろこび　一四七ぺ）

1は、中宮安子が選子内親王を出産後、薨去する場面で、「や」が安子の死に驚愕する付き添いの者たちの緊迫感を表す感動詞として用いられている。2は、人の最期を看取る時の語として用いられたもので、『新編全集』の注に「母貴子の最期を看取る者は、自分のほかにはいないだろう、の意。」とある通りであろう。3は、娘の長家室の病状の悪化に母北の方のうろたえる様子を、「や」で表している。この三例は、『源氏物語』のそれと同じく緊張・緊迫の情況を表している。ただ、それが人の最期とかそれにつながる病状の悪化を表すというように、場面が限定されているということで、『源氏物語』とは相違する。

4は、四の宮が、御禊の行列の最後に姿を見せた摂政兼家に、「や」と声をかけるという例で、前掲の三例とは全く異なるものである。このような用法と比べると、『源氏物語』の感動詞は、かなり局限して用いられている、と言えよう。

「やや」

『うつほ物語』に一例見えるが省略する。

『落窪物語』には三例ある。

1（あこぎハ）人も寝しづまりにければ、「やや」と、みそかによりてへやの戸うち叩く。（落窪姫ハ）音もし給はず。（巻之一　一〇二ぺ）

2（少将→少輔）「やゝ、起き給へ。聞ゆべき事ありてなんまうで来たる」

（巻之二　一二九ぺ）

3（北の方→左衛門佐・越前守）「やゝ。此の御返事申せ」

（巻之四　二一九ぺ）

三例とも相手の注意を喚起するための呼びかけの感動詞と見られる。

『枕草子』には四例ある。

1しひてせばがりいづれば、権中納言の、「やや、まかりぬるよし」とて、うちゑみ給へるぞめでたき。（三五段　八〇ぺ）

2「誰か沓にかあらん、え知らず」と主殿司、人々のいひけるを、「やや、方弘がきたなきものぞ」とて、いとどさわがる。

（五六段　一〇〇ぺ）

3右の人、「いとくちをしく、をこなり」とうちわらひて、「やや、さらにえ知らず」とて、口をひき垂れて、「知らぬことよ」とて、

（一四三段　二〇二ぺ）

4子の四つ五つなるは、（略）親の来たるに所得て、「あれ見せよ、やや、はは」などひきゆるがすに、（一五二段　二〇七ぺ）

物語作品ではないが、会話文がよく出て来るので、比較の対象と

して取り上げる。

1と3の引用文中に「うちゑみ給へる」「うちわらひて」などの動作表現も出て来て、呼びかけの語として用いられており、『源氏物語』のような緊迫した場面の感動詞として用いられたものではない。

『大鏡』には三例ある。

1出車より扇をさしいだして、「やゝ、もの申さむ」と、女房のきこえければ、（頼忠　九四ぺ）

2ながえのとながら、たかやかに、（道長→道隆）「やゝ」と御あふぎをならしなどせさせたまへど、（道隆　一七七ぺ）

3（伊周ハ）ふとりたまへる人にて、すがやかにもえあゆみのきたまはで、登花殿のほそどのゝ小部にをしたてられ給て、「やゝ」とおほせられけれど、（道隆　一八三ぺ）

3は、伊周が、機敏に動けず、窮地に追いやられた場面で使われた緊張の表現と採れるが、他の二例は呼びかけの語である。

『栄花物語』は、一三例と多く用いられる。二つに分けて挙例する。

Ⅰ．緊張（緊迫）した情景を表すもの

1．2この男君達、「やや、ものけたまはる。今さらに何かは御殿籠る。起きさせたまはん」と聞えさするに、すべて御いらへもなく驚かせたまはねば、寄りて、「やや」と聞えさせたまふに、このほかに見えさせたまへれば、

（第二　花山たづぬる中納言　一〇八・一〇九ぺ）

院の女御（超子）が頓死する場面である。庚申の夜に、脇息に寄り掛かって寝入った女御を、男たちが起こしにいって、事の重大さに気づくのである。初めの「やや」は、呼びかけの例の方に入るが、後のそれは、異常さに気づいて発したもので、これによって緊迫した情景が描出されていく。

3（長家室〈斉信女〉→父・母）「（略）いかに思さんずらん」とばかりのたまへば、「やや、いかに思さるるぞ」と、大納言殿も母北の方もつととらへたてまつりて、ものもおぼえたまはぬほどに、

（第二十七　ころものたま　二三ぺ）

長家室〈斉信女〉が、両親に自分が先立つ不孝を詫びたのに対し、両親が驚愕して発した語である。

4されど、おほかたは変らぬことどもなれば、（斉信または長家の心中）「やや、こはいかに」とのみこそおぼめかせたまへ。

（第二十七　ころものたま　二七ぺ）

前掲の例に続く場面で、亡き女の部屋の様子は一部を除き殆ど変わっていないのに、女はこの世の人でない事態に、親の斉信または夫の長家が発した語である。異常さのなかの緊迫感が「やや」によって描出されている。

5（公任大納言ハ）さて帰らせたまひては、わが御乳母の尼君のがりさしのぞかせたまへれば、ややとかしこまるけはひも、いとあはれ

なれば、（第二十七　ころものたま　四六ぺ）

公任大納言が乳母の尼君のところを覗くと、尼君が恐縮する様子が「やや」を伴って描写されている。こういう「やや」は、同じ作品の「や」の2と類似し、実際に発する感動詞というより、緊張した動作や状態を表す語となっているとも説明できよう。

6（妍子ノ）御気色の例ならずおはしませば、（道長）「やや、参りはべり」と申させたまへば、（第二十九　たまのかざり　一三〇ぺ）

7殿の御前（道長）、御衣をひきのけつつ見たてまつらせたまひて、「そらごととこそおぼゆれ。やや」と申させたまひ、御数珠を押しもませたまひて、（第二十九　たまのかざり　一三三ぺ）

右の二例は、皇太后妍子の病が悪化し、臨終直前に父道長が参上し、6のような「やや」が用いられ、亡骸となった妍子に呼びかけた「やや」が7の例である。前掲の4と同じように考えられよう。

Ⅱ．呼びかけのもの

1一の宮おはしまして、「おとど、やや起きよ起きよ。馬にせん」と起したてまつらせたまへば、（第十三　ゆうしで　一二二ぺ）

堀河女御延子とその父左大臣が悲嘆にくれて臥しているところへ、一の宮（敦貞親王）がやって来て、呼びかける語である。

2なほふりがたき御かたちなりかしと御覧じて、（小一条院ハ女御ヲ）「やや」とおどろかしたてまつらせたまへば、

（第十三　ゆうしで　一二四ぺ）

小一条院が女御延子を訪問する場面で、臥している延子に呼びかける語である。

3さてのみあるほども久しければ、（頼光ハ催促シテ）「やや」とたびたび仰せらるれば、（第二十三　こまくらべの行幸　四二一ぺ）

関白頼光が、競馬の出走を促す語である。

4二郎君、三郎君、とどめきおはして、「やや、大父（おほてて）がおはしたりけるを知らで、今まで来ざりけるは痴れたりけるわざかな」「あはれ、われは頸にかからん」「われは膝にこそゐめ」など競（きほ）ひ争ひ騒ぎあはせたまへば、（教通）「いで、あなもの狂ほし。かうな仕うまつりそ仕うまつりそ」と制しきこえたまふに、

（第二十七　ころものたま　四四ぺ）

出家を決意して来訪した祖父公任に、外孫たちが甘えかかる場面に用いられている。父親の教通が、それを制止するのであるが、「仕うまつりそ」の語句が繰り返されている点が注意される。

5（信長ガ）御前の高欄におしかかりておはすれば、関白殿見たてまつらせたまひて、「やや、こち」と申させたまへば、

（第二十八　わかみづ　八七ぺ）

関白殿（道長）が、六歳の孫の信長に呼び寄せる言葉に使われている。

6大頭（だいがしら）などいひて、例の恐ろしげに筋太き紙縒りかけて、さすがにうるはしくて渡る、馬に乗りて持たれば、（見物人ハ）心々にて、「やや」といふほどもをかし。

（第三十三　きるはわびしとなげく女房　二八一ぺ）

御禊の行列の見物である大頭に、見物人達の歓声が、「やや」によって表されている。この例は、前掲「や」の4の四の宮が兼家に呼びかけたものの畳語とも見做されるものである。

この例などを見ると、『栄花物語』では、「や」と「やや」を区別していないように思われ、佐藤定義『栄花物語の文法的研究』（一九八八年）の説くところに従うべきとも考えられる。ただし、「や」の1 2 3のような用法と「やや」の一三例を全体として比べると、区別されている傾向も認められるのではないか。

おわりに

一節に、擬古物語『我身にたどる姫君』の感動詞の例を取り上げて『源氏物語』との比較の端緒としたが、そこでの前斎宮の会話には感動詞の繰り返しも見られた。感動詞以外の繰り返しを、次に引いて見る。

○（兵衛佐）「また人やおはします」と問へば、（前斎宮）「無しと言へ言へ」と突きたまへば、（小宰相）「人も侍らず」と言ふ。（兵衛佐）「さば、誰れと物は仰せらるるぞ」といへば、（前斎宮）「風の吹きつるとを言へ言へ」とのたまへば、またさ言ふ。（兵衛佐）「あやしかりける風かな」とて、（兵衛佐）「跡なき方に行く舟も」など、しのびやかにうち詠めて倚りゐたる。（巻六）

現女帝の異母妹に当たる狂気の前斎宮は、今は亡き母御匣殿の旧邸に住んで、叔母に当たる大納言の君という尼に世話になっている。狂気とされるように、侍女たちと痴態に耽り、右大将のような人にもその様を見られてしまうなど、様様のハプニングが書かれているのであるが、右に引用の一節は、狂前斎宮から寵愛（痴態）の相手とされている小宰相のところに、兄の兵衛佐が妹のことを心配して訪ねてくる場面である。これにも嫉妬する宮と小宰相と兵衛佐との会話のやりとりが書かれており、総体的には平安和文である。しかし、会話中の言い方には『源氏物語』にはほとんど見られないものがある。傍線部のものである。この「言へ言へ」に関して〝狂宮の、がさつでせっかちな物言い〟とする注もあり、間違いとも断じ得ないが、平安の皇族・貴族が実際の会話で、このような言い方をしなかったとは考えにくいのではないか。前節の『栄花物語』の「やや」のⅡ．1の例文中の一の宮の「起きよ起きよ」、4の例文中の教通の「かうな仕うまつりそ仕うまつりそ」は皇族・貴族の繰り返し表現の一例とできよう。

『源氏物語』の会話文にはこのような繰り返し表現は、第二節の(2)の田舎者大夫監の「然（さ）り〳〵」に見られるが、他には多く一般に見られるものではない。これは又、別に論じなければならないが、『源氏物語』の会話文は、本稿の冒頭に述べたように、登場人物のセリフではあっても、当時の皇族・貴族の日常会話の実態を写したものではなく、むしろ、地の文の一種のバリエーションとして、作者が細心の注意を払い、意図的に整え、それが語り手

によって、読者（聴者）に発信されたものと推測されるのである。

使用テキスト『源氏物語』…新日本古典文学大系
『栄花物語』…新編日本古典文学全集
『落窪物語』『紫式部日記』『枕草子』『大鏡』
…日本古典文学大系